

## 19

## 『傷寒論』熱入血室における意味解釈の再考

莊 明仁

台湾・瑞聯中醫クリニック

熱入血室という言葉を巡って、歴代の医学者達は様々な説を立てて臨床に応用してきた。熱入血室とは、婦人患者の生理期によく見られる症状であるが、これまで熱入血室を深く研究した資料が少ないため、誤診されるケースが多い。熱入血室の起源を辿ると、『傷寒論』や『金匱要略』に見ることができる。しかし、『傷寒論』や『金匱要略』の条文はシンプルにして、奥深いため、後の医学者達が自らの解釈を築いてきた。解釈には、①「衝脈説」：金・成無己『傷寒明理論』によると、「傷寒熱入血室、何以明之？室者屋室也、謂可以停止之處。人身之血室者、榮血停止之所。經脈留會之處。即衝脈是也。」と血室は衝脈のことであると述べられている。②子宮説には、初期のもので南宋・陳自明『婦人大全良方』がある。此によると、「巢氏病源并産寶方并謂之胞門子戶、張仲景謂之血室」と記されており、血室は胞門子戶、つまり子宮であるとしている。また、明代の張景岳『類經附翼・求正錄』では、「故子宮者（中略）醫家以衝任之脈盛於此、則月事以時下、故名之曰血室。」と記されている。さらに、日本の医学者である山田正珍と森立之も血室について同じく子宮であると記されているが見解が少し異なる。山田正珍『傷寒論集成』は、「血室、謂胞、即子宮也。」、正しく子宮であるとしているが、一方で森立之『傷寒論考注』では、「血室、子宮也。從子宮支出之脈、為衝任二脈。蓋子宮是根、衝任是枝葉也。」と、子宮が血室であり、子宮から伸びている経脈が衝任二脈であると述べている。

③血海説には、明代の吳又可『溫疫論』の「血室者、一名血海、即衝任脈也、為諸經之總任。」や後藤慕庵『傷寒論析義』の「血室、言血海、言諸經之血朝宗於此。」があり、どちらも血室は血海であると解釈している。

④「肝臓説」では、清・柯琴『傷寒來蘇集』がある。原文では、「血室者、肝也。肝為藏血之臟、故稱血室。」と述べられており、肝臓は藏血しておく器官であるが故、血室は肝臓であるとしている。また、大塚敬節もこの説を支持している。

⑤下焦油膜説では、清・唐容川『傷寒論淺注補正』の「血室即下焦油膜中一大夾室也、上連兩脅之板油又上連胸膈間之油膜。熱入血室、連及板油、胸膈、則脹滿如結胸狀。」がある。症状には、胸脅苦滿があるため、下焦油膜が血室であるとしている。

⑥経絡及心臓説では、橘春暉『傷寒外傳』：「経絡心臓並言之則曰血室矣。血室者及経絡及心臓是也。」と、経絡と心臓が血室であるとしている。

⑦血道説では、川越衡山『傷寒論脈証式』がある。「熱入血室言邪氣入血道也。室猶刀室之室、弘指血道言之也。」と、熱入血室は邪氣が血道に入るため、室は刀の鞘の様なものであるため、細長い血道が血室であると解釈している。

⑧腹腔内（特に骨盆腔内）の静脈叢説：江部洋一郎『經方醫學4』：「邪の本体は血室以外（この場合は膈）に存在し、邪正闘争の結果生じた膈の熱が、血室に波及しているに過ぎない。あくまで熱入血室であって、邪入血室ではない。」と述べている。

その他、伊藤鳳山『傷寒論文字考績篇増補』の子宮と肝臓二つに血室が存在するなどという説も存在している。

しかし、筆者は、室は膈であると解釈している。「室」とは「至は、矢がびたりと目標まで届いたさま。奥までいきづまり、その先へは進めたい意を含む。室は「ㇿ（やぬ、いえ）+音符至」で、いちばん奥のいきづまりのへや。室（いきづまり）、膈と同系。」（藤堂明保『新漢和大辭典』）と定義されている。つまり、室は膈の假借字であり、室とは即ち陰道を指す。熱入血室は、月経期間に熱邪が陰道に入り込み起る病症である。